

尾瀬ネットワーク通信

Vol 1 2. No. 4 2010年2月



目次

尾瀬を守る会の新会長に大石正光氏	1
地球温暖化影響調査	1
指導員養成講座 修了者レポート	2
50年前の尾瀬の山小屋と登山コース	3
尾瀬の植物(5) ギンリョウソウ	3
内海広重氏を偲んで	4
事務局&会計よりお知らせ	4
事務局だより	4

尾瀬を守る会の新会長に 大石正光氏（参議院議員）

理事、尾瀬を守る会事務局長・高橋 喬

尾瀬自然保護ネットワークなど尾瀬の自然保護関係4団体で構成する「尾瀬を守る会」の新会長に大石正光氏（参議院財政金融委員長、民主党）が就任された。同会の会長は、中根一郎前会長が昨秋逝去されてから空席であったが、4団体の担当理事が1月20日、参議院議員会館に大石氏を訪ねて会長就任を請願し、同氏の快諾を得ることができた。



【大石正光氏】 就任にあたって大石氏は「尾瀬の自然保護は土曜、休日に集中する入山者によって破壊が急速に進んでいる。入山規制や入山料の徴収などを前向きに検討すべき段階にきている。また、木道を最も脆弱な湿原の真ん中に敷設しているばかりか、木道の幅をどんどん広げて“スーパー木道”にしている。木道を森林の縁に移して、そこから尾瀬ヶ原や尾瀬沼を展望するようにすれば、規模も縮小できるし、湿原の回復も期待できる」「民宿や山小屋も尾瀬の入山者が減っているため、規模を広げてツアー客を安く泊めるなど自ら首をしめている。このような意識を変えていくことは、非常に重要なことだと思う。」と語った。

大石氏は衆議院議員を経て参議院議員に転じ、環境委員長、国家基本政策委員長、予算委員長を歴任。平成21年10月から財政金融委員長の要職にある。

本会も活動資金の助成を受けている（株）セディナの「地球にやさしいカード」の助成団体を選定する（財）緑の地球防衛基金の会長でもある。

尾瀬を守る会は、平成8年に尾瀬保護財団の発足に伴って尾瀬の自然を守る会が解散した際、行

政主導型の自然保護事業になることを憂慮した大石武一・初代環境庁長官（大石正光氏の厳父）が立ち上げた。

平成14年「尾瀬」保護と適正利用のための提言2002を発表。これまで2度にわたる尾瀬の特別保護地区への携帯電話基地局建設計画に対して署名活動などで反対、計画を撤回させた。また、環境省関係では長蔵小屋別館跡地へのヘリポート建設計画や尾瀬沼キャンプ場改修計画などに現地集会などで抗議。計画の縮小や管理方法に万全を期するよう要請するなどの活動を行い、成果を上げている。このほか群馬県新治村（現みなかみ町）と福島県郡山市で市民を対象とした「尾瀬フォーラム」を開催した。

現在の加盟団体は、本会のほか福島県自然保護協会、尾瀬自然保護指導員福島県連絡協議会、全国山林保護ネットワーク。事務局は（財）緑の地球防衛基金（東京都中央区新川2丁目）内に置いている。

地球温暖化影響調査

～残雪調査及び移入植物の予備調査～

担当理事 永島 勲

地球温暖化は、気温の上昇によるブナ等樹木の衰退や高山植物の減少、農産物の収量減少や品質低下、集中豪雨による洪水や土砂災害など、私たちの生活にも影響を与えつつある。

尾瀬においては1961年から10年間の最高気温（6月～10月）の平均は24.0℃、1998年から10年間の最高気温（6月～10月）の平均は26.2℃で、37年で各10年間の最高気温（平均）の上昇幅は2.2℃と大幅に上昇している。同様に最低気温（平均）の上昇幅は1.6℃と、こちらも大きく上昇している。

地球環境が激変すると、その変化に対応できない動植物は絶滅に追いやられる。それは今までの生態系が崩壊することを意味する。たとえ温暖化に対応できる動植物であっても、食物連鎖や水の循環が分断されれば生存は危うくなる。

地球温暖化に伴う気温の上昇は尾瀬の自然（生態系）にも何らかの影響を与えていると考えられる。例えば、このまま気温が上昇すると湿原では泥炭の分解が始まり、池塘の崩壊や湿原自体の乾燥化が進む可能性がある」と指摘する専門家もいる。中長期視点に立ち、地球温暖化に伴う影響調査の第一歩として、今年度は残雪期の積雪量と移入植物（外来植物）の予備調査を実施した。

【残雪調査】

調査日：平成21年5月4日、天候：晴
 調査場所：大江湿原に定点調査箇所を4地点設定
 調査者：安部晃樹、磯部義孝、伊藤アケミ、大橋文江、亀山良吉、円谷光行、永島勲、松前雅明、鹿野キミエ
 調査結果：木道沿いから約10m離れた4地点で計測 ①大江湿原入口110cm、②小淵沢田代分岐点110cm、③ヤナギランの丘分岐点83cm、④三本カラマツ分岐点95cm

雪面はシャーベット状であったが、固く締まっていた細い鹿の足跡も鮮明に確認できた。大江湿原の積雪量は沼山峠寄りが多く尾瀬沼側が少ない傾向がみられた。4地点の平均積雪量は99cmで、例年より40～50cm位少ないようであった。

【移入植物調査】

調査日：平成21年9月12日、天候：雨
 調査場所：山の鼻の2地点（A地点＝尾瀬ロッジの北側、B地点＝無料休憩所の北側）
 調査者：伊藤アケミ、亀山良吉、坂本敏子、千葉早苗、永島勲、松澤登
 調査方法：1㎡の枠取り内の移入植物の種類を特定し数量をカウント（コドラート方式）
 調査結果：全部で7種類の移入植物を確認。圧倒的に多いのはオオバコであった。

種類	A地点本数	B地点本数
オオバコ	65	460
シロツメクサ	24	0
スギナ	24	0
イヌタデ	23	0
ギシギシ	8	4
ゲンショウコ	5	67
ミゾソバ	4	0
合計	153	531

上表の通り、両地点で植生に大きな相違がみられた。A地点の傍には沢水が流れていてB地点より湿潤で、かつ人の踏付けの少ない環境が影響しているものと思われる。
 今後の課題：地球温暖化の影響は緩やかに広範囲

にわたると思われ、漠然としていて捉え難いうえに、温暖化との関係も単純に結び付け難い面がある。また、短期間で結果の出るテーマではない。

調査手法、調査対象の選定、定点調査体制などに更なる創意工夫が必要である。通常の活動においても温暖化の影響という視点から尾瀬の自然を注意深く観察し、継続して広く情報を集めることも重要である。

なお、平成22年度からは初谷理事が担当理事



として本調査を統括することになりました。4月17日の定期総会の特別講演は

「地球温暖化に伴う自然環境への影響」と題して、長野県環境保全研究所の浜田崇氏の講演を予定している。

指導員養成講座 修了者レポート

養成講座に参加させて頂いて感じたこと

鹿野 キミイ

疲れた！この一言が本音ですが・・・。
 尾瀬ヶ原を歩き始めて、私が初めて足を踏み入れた7、8年前とはずいぶん様変わりしたように感じました。外来植物（クレスン、ヤマドリゼンマイ等）の増加等。

そして、何といたってもゴミ問題が一番気になりました。何十年も前からのゴミが、森の中に秘かに隠されていたとは驚きです。「ゴミは出さない、持ち帰る」この一言につきます。

トイレもウォシュレットになり、驚きです。

写真でしか見たことのない植物が間近に見られ、これこそ「百聞は一見にしかず」です。山の中で木の実をつまんだことで、遠く子供の頃食べたのを思い出し、木道で野兎に出会ったこと、これも生涯で二度目です。更には、ドシーンと枯れ木の倒れる音、正に一瞬の出来事で、今回参加しなければ絶対見ることも体験することも出来ない場面がいくつもあり、貴重なものでした。

体力が追い付かず迷惑を掛けた部分を反省し、トレーニングに励み、また行くぞ！こんどこそは、そんな気分です。靴が合わなかったのが最大の理由です。（小さく書きます）山の空気が良いので滞在中は体調がすごく良かったのも幸せでした。ありがとうございました。

50年前の尾瀬の山小屋と登山コース

～昭和30年の尾瀬パンフレットを発見(続き)～

理事長 永島 勲

私ごとで恐縮であるが、亡父の遺品を整理していたら昭和30年(1955年)の東武バス発行の尾瀬の登山パンフレットが見つかった。前号に続き、今回は55年前の尾瀬の山小屋の状況と登山コースについて取り上げてみたい。

山小屋の状況

当時の尾瀬には山小屋が7軒あり、合計の収容人員は680人であった。最大は富士見小屋の150人、最小は龍宮小屋の30人であった。長蔵小屋はバンガロー50人、自炊小屋50人も所有していた。収容人員からも大清水と富士見下からの入山者が多かったことが分かる。

地図上には東電小屋があったが、山小屋案内には載っていない。気象観測小屋として、一般の入山者は泊めていなかったことが読み取れる。現在5軒ある尾瀬林業の山小屋は1軒も無かった。

長蔵小屋	100人収容	連絡先	戸倉 平野靖子
檜枝岐小屋	70人収容	連絡先	戸倉 萩原岩雄
弥四郎小屋	100人収容	連絡先	檜枝岐村 ー
温泉小屋	100人収容	連絡先	檜枝岐村 ー
富士見小屋	150人収容	連絡先	戸倉 萩原武治
龍宮小屋	30人収容	連絡先	戸倉 萩原善作
山の鼻小屋	130人収容	連絡先	戸倉 萩原 豊

宿泊料金は1泊(米持参、二食付)で400円。中食(握飯)は調味料付(米持参)で50円。素泊は寝具付で260円、寝具なしで150円。山小屋の宿泊は今では考えられない米持参が必須であり、中食(昼食)も調味料として味噌等を握飯にまぶした極めて質素なものだった。

なお、現在の山小屋数は18軒で、その収容人

員は2,386人。最大は長蔵小屋の300人、最小は尾瀬沼山荘の50人である。

当時は栃木側(日光湯元温泉)から金精峠を越えて入山する人が多かったようで、旅館の宿泊料金も掲載されていた。白根温泉は400～800円、丸沼温泉は800～1,500円。丸沼畔には簡易宿泊所があり、収容人員は50名、素泊(寝具付)は300円であった。

登山コースの変遷

登山道は現在のコースと比べるとかなり異なっていた。まず、当時は利用していたが、今は無い登山道は①アヤマ平～山の鼻(直通ルート)②山の鼻～東電小屋(尾瀬ヶ原北側のルート)③見晴～東電小屋(尾瀬橋付近～直通ルート)④丸沼温泉～四郎峠～大清水の4コース。

特に、尾瀬ヶ原の北側を通る山の鼻・東電小屋間の直通ルートがあったことは驚きである。逆に、当時は無かったが、現在は利用されている登山道は多い。①鳩待峠～アヤマ平②鳩待峠～至仏山③三又～ヨッピー橋④龍宮～ヨッピー橋⑤尾瀬沼東岸～燧ヶ岳(長英新道)⑥見晴～燧ヶ岳⑦三平下～沼尻(尾瀬沼西岸コース)⑧富士見峠～白尾山～皿伏山～尾瀬沼(稜線コース)⑨大江湿原～小淵沢田代の9コース。

経済成長に加え車道の延長と交通網の整備により入山者の流れが大きく変わり、それに伴い登山コースや山小屋の数と規模が拡大してきた。

パンフレットの末尾には“いわな釣り”の案内があり、「6月中旬～6月下旬、沼尻川・猫又川・ヨッピー川・大堀川・川上川、竿(2間～2.5間)、餌はみみず、7月以降は毛鉤」と載っている。今日ではまったく考えられない自然保護と懸け離れた形で尾瀬が利用されていた。(完)

～尾瀬自然講座～

尾瀬の植物(5)

全身真っ白な不思議な植物 ギンリョウソウ
(銀竜草) イチヤクソウ科 腐生植物

日本各地、東アジアの亜高山帯から低山帯に広く分布し、やや湿った林床の落葉樹が堆積している腐植土に生育します。

ギンリョウソウは腐生植物と呼ばれ、葉緑素を持たず光合成ができないため、菌類(カビやキノコの仲間)と共生し菌根をつくり菌糸から栄養をとっています。それゆえ普通の植物が生育できな



い暗い林床下でも立派に育つことができるのです。

草丈は10～20cm、全草透明感のある白色で鱗片状の退化した葉を互生し、下部は鱗状に重なる。1カ所から数本かたまって茎を立ち上げ、茎頂に1個の花を下向きにつける。(花期6～8月)

がく片3～4枚、花片4～5枚、基部が膨らんだ釣鐘型。雄しべ10本（葯は黄色）雌しべ1個（柱頭は紫色）からなり、暗い樹林でもなかなか目立つ存在です。開花期間はおよそ7～8日、香りはないがたくさんの蜜を出すので、ハナバチなどの昆虫が入り出すたびに花粉が柱頭につき自家受粉と他家受粉を可能にします。

果実は液果できわめて小さな種子を多量に含み、熟すとつぶれて種子を放出します。種子がどの位の年月を経て菌根をつくり地上に現れるのかは不

明であり、ギンリョウソウは今だ判らないことの多い植物です。

語源は下向きにつく花を竜の首に、葉を竜の鱗にたとえ「銀竜草」、別名のユウレイタケは暗い林床に白い衣をまとったような姿を幽霊にたとえたものです。

※参考文献：世界の植物草木編（ニュートンプレス）、植物の雑学事典（日本実業出版）、野草の名前（山と溪谷社）、日本野生植物Ⅲ（平凡社）
（指導員 深山 美子）

内海広重氏を偲んで

指導員 武 繁春

1971年夏、尾瀬の自然を守る会の発足とともに代表となり、先生の生活は一変した。会の活動拠点は、当初、（財）国立公園協会であったが、その後は永く勤務先である高等学校の生物教室を提供した。当然、周りは白い目で見ていることであろうが、自分流を押し通した。なにかから何まで自分で発想し、行動した。授業との掛け持ちで時間は限られていた。訪問や電話も夜討ち、朝駆けが常となった。会合のさなかでも、コックリしだすことがあ



った。この運動がなければ、博物館の仕事をしていただろうとも。また、高校生の頃、ドウランいっばいに植物を採集し、自宅の居間に広げて母親を困らせたとも話していた。冬、岸さんの車で群馬の協力者宅を数か所回り、真夜中にご実家に到着した際、お母様が背中を丸くしながら囲炉裏に火をくべて、息子の久方ぶりの帰りを待っていた。尾瀬に明け暮れた38年、本当にお疲れ様でした。お母様と静かな時をお過ごしください。

＝事務局よりお知らせ＝

《2010年度定期総会》

*日時：2010年4月17日（土）13:00～17:00

*会場：大宮ソニックシティ「902号室」

☎048-647-4111

*議題：①2009年度活動・会計・監査 報告

②2010年度活動計画・予算案

③定款変更（事務所移転）

④役員改選

⑤その他

*特別講演：長野県環境保全研究所 濱田 崇氏
「地球温暖化に伴う自然環境への影響」

《訃報》

会員の山田 鉦一氏が、1月1日初詣中に急逝されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

＝会計よりお知らせ＝

*平成22年度会費 3,000円

*保険に入る方保険料 1,600円

*総会欠席の方は、3月末までに同封の納付書で納めて下さい。

事務局だより

- ①12月18日（高崎市）第11回尾瀬フォーラム参加 永島、坂本、椎名、田中
- ②1月22日（財）緑の地球防衛基金（株）セディナよりの質問に返答書作成 永島
- ③2月25日 緑の地球防衛基金に21年度活動報告書作成と提出 永島

最後までご購入して頂き、ありがとうございます。会員のみなさんからの投稿を、お待ちしております。

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

Vol.12 No.4号 2010年2月20日 発行

発行人：永島 勲

編集担当：鎮目 安康

Web担当：島田 富夫

〒100-0014

東京都千代田区永田町 2-17-5-203 (株)SEC 内

電話 03-3851-0321/FAX 03-3581-2178

Web : http://www.geocities.jp/oze_net/

